

## 未来ノート

-202Xの君へ-

## マラソン

いち やま ま お

## 一山麻緒

ヒロインの誕生

父のような2人

MGC敗戦から

いつも前向きに

## 「鬼」練習こなし 五輪切符

今年3月にあった名古屋ウィメンズマラソンで、一山麻緒(23)はワワワワワワが、両手を広げてゴールテープへ飛び込んだ。日本歴代4位となる2時間20分29秒の大会新記録で優勝。最後の東京五輪選考会で、残り1秒に滑り込んだ。

「自分のしたい走りがスタートからゴールまでイメージ通りにできた。中学生くらいの時から東京五輪に出たいとぼんやり思っていたことを手にすることができた。今日みたいな日が来るのが夢だったので、夢みたくて少しは

にかんだ表情を見せた。ゴール直後は、永山忠幸監督(60)の胸に抱きつき、号泣していた。この涙が物語るように、簡単な挑戦ではなかった。

一山は鹿児島県出水市で育った。スポーツ少年団で陸上を始めたのは、小学5年生。「学校の選抜リレーに出たい」。いつもチームで2番目が悔しかった。

その約1カ月前の大阪国際女子で、松田瑞生(25)は2時間21分47秒で優勝した。当時の日本歴代6位という好記録。これを超えなければ、一山の東京五輪への道は絶たれる状況だった。それでも、

1学年下の仲が良い友達にマラソン大会で負けて大泣きした。母の優子さん(51)は言う。「泣いた姿を見るのはいつも悔しいとき。名古屋で優勝した涙は、それだけ本人にとって特別だったんでしょ」

永山監督は「彼女が名付けた私の『鬼鬼メニュー』を絶対に外さないでやってくれたのが、今回の結果につながった」とたたえた。

こうして誕生した新ヒロイン。そんな一山の道しるべとなったのは、父のよう

つかない。父の存在は、父のようにつな

に慕う2人の存在だった。

(辻隆徳)



3月の名古屋ウィメンズマラソンで好タイムで優勝した一山麻緒＝代表撮影



東京五輪のマラソンの代表となり、会見に出席した一山麻緒(上段右から2人目)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。